

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始

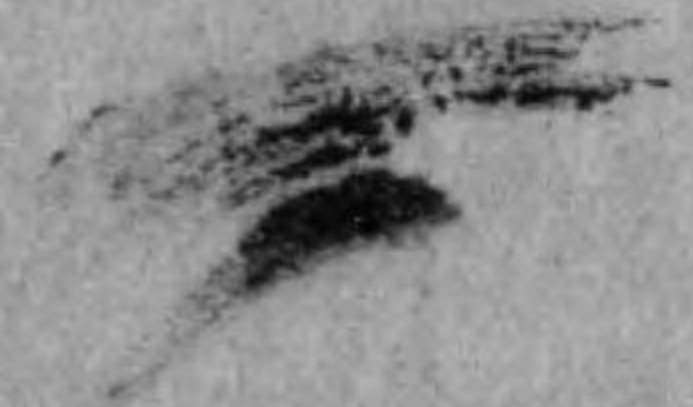


桐
氏
系

102

桐
氏
系

桐の心葉



相の家さ
 傍に佇む
 かみ
 名にありと
 木の沖
 相の
 心

歌の筆自者著

桐のひと葉の自序

おのれ若かりし時歌會なごに臨むいごま無かりければ題詠
ごいふものよみたることいとすくなし今のこれるは昔京都
に住みたるころおほけなくも故晃親王の山階宮の御會にめ
されしをりくによめる歌ごもなりその外は人にこはれい
なみかたくてよめるもあれご大かたはをりにふれつゝ心に
うかひたるまゝをよみ出て曾て人に見せたることなければ
ごゝのはぬふしも多かるへし凡四五十年の間のことなれば
その數は少かられご西に東にあまたゝひ家を移したる毎に
失ひたればわつかに残れる紀行ごもの片端あるは反古のう

らなごにかきちらしたるかあるのみなりしをこたひわか女
壻森博士がかくてうせはてんもくちをしければこて中野ぬ
しにはかりかきあつめて一冊には綴りなせりさておのれに
はしかきせよといひたこせけるまゝにそのゆゑよしを述へ
て桐のひと葉のひとこを書きそふるになん

大正六年三月東都桐か谷の村居に於て

烟田真幹
しるす

桐のひと葉の自序

桐のひと葉

烟田真幹 著

春

元 日

何こもけふは忘れて花鳥のねいろ待たるゝほかなかりけり

新年試筆

鶯もけさこそ来なけここのはの花さきそむる筆のはやしに

遠山雪

天放る遠きみやまも君か代の豊年しるくつもるしらゆき

新年見鶴

門松のかせのしらふるここのねに鶴の羽衣そてかへすなり



千代經たる老の姿もあらたまの年たつけさわかの浦つる

大正六年一月二日の朝またきより雪降りければ

見渡せはふりつむ雪の六つの花御代も六こせの初空にして

春立ちける日東國より來たるふみの返しに

東よりけきたつはるやなつかしき君か玉章もちて來つらん

春到管絃中

絲竹のしらへに春もおくれしこ立ちてかすみの袖かへすなり

春 氷

根芹つむ野澤の末の忘れみつ春をわすれてこほりるにけり

春風解氷

のこかなる風にくたけて水の面に春のこころこ浮く氷かな

岩かこにふるゝ氷のおこすなり谷間に春のかせやふくらん

初 春 霞

きのふしも雪にかゝけし玉たれのをすの外山は霞みそめけり

野 若 菜

狩人の雪ふみわけしあこめて野邊の若菜はもえそめにけん

朝 早 鶯

朝ほらけたにの柴のさほそくこねにたてそめて鶯のなく

朝 鶯

あけぬれは日影たゝさす片岡のあしたの原にうくひすのなく

未 開 梅

立つ年の初日の影はうけなからいつまで梅の春をまつらん

行 路 梅

朧夜の月にかをりて咲く梅は誰か通ひ路のしをりなるらん

餘寒

咲きそめし梅の梢に風さえて雪の花ちるきさらきには
月の瀬にやこりけるあした

朝ほらけ谷間の狭霧かきくらしのぼるや梅の匂ひなるらん
夜梅

のさけさは風なきよはの薄曇り心こかをるのきのうめか香
月かけの落つれば花の色消えてむなしき空に梅かをるなり

梅風

ふしみやま梅のかをりの追風を真帆にうけたる宇治の川舟
折梅

山里の垣根の梅も手折られていつこのねやの花さ咲くらん
世の中にきそはぬ身にもひこ枝はをりてかさゝん梅の初花

梅遠薫

鶯の來なくをみれば谷間まで軒端のうめのはなやかをれる
伏見へ梅見に行きて歸りける夜

花の香をわけし伏見の夢さめてをかめにのこる梅の一朶

籠鶯

このうちに春をさこりて世の中のはなにまよはぬ鶯のこゑ
園の竹きりてつくりし籠の中に一ふし高きうくひすのこゑ

春日祭

舞人のつらぬる花の眞袖より春日の野へはかすみそめけり
二月のなかははかり吉野山の浦壁ぬしのもごにやこりて

また咲かぬ花をも夢にみよし野の旅寝のふすま暖にして

春山月

ましらなく岸の梢にかけさえし月ものごかに霞むはるかな
咲き出てん花はまたしき春山をひこりしめたる月の影かな
さわらひも今やもゆらん山のはをのほれる月の影けふるなり
さほ姫のかさしのたまか足引の遠山眉にかゝるつきかけ

野 春 駒

のさけくも野飼の駒そ嘶ゆなるかすみの手綱誰が引くらん
うらくご霞める野邊の駒見れば朧の月毛はるの日のかけ

春色浮水

影うつすつゝみの柳きしの梅いつれか水のころひくらん
春くれは氷も波にたよひて氷のころもうき立ちにけり
水の面をさちし氷も打ち解けて浮へる鯉のひれゆたけなる

春 川 明治二十八年

浪あれしありなれ川も今年より長閑けき御代の春にあふらん
丹波路の深山の雪やさけぬらんさゝれ浪こすかも川つら

春雨殖菊

暖に園生しめりてはるさめのふる根の菊をけふやうつさん

春雨のふりける日

もえわたるさしの柳のけふりより水際霞みてはるさめのふる

柳

年経てもみこりのかみの垂柳わか白髪のうらめしきかな

柳 似 烟

ちよふ根もけさはけふれり利根川の堤の柳もえそめぬらん

隣 柳

見るまゝに隣も遠くへたゞりて柳のこすゑ打ちけふるなり

池上柳

春雨の晴れゆく池のきしつたひなひくけふりや柳なるらん
池の面の氷さけゆく水際よりけふりそめたる青柳のいこ
中島にもゆる柳のいろみれば春こそわたれいけのかけはし

田家柳

賤の女の手業たすけて軒端にも風のはた織る青柳のいこ

夕柳

夕されはなひく柳のいろきえてかせの姿もくれそめにけり
かも川の岸の燈火敷そひてなみ木のやなきいろそくれゆく

桃花

待ちつけて世にめつればや二つ三つ咲きてももゝの花さいふらん

春曙

霞しく花のねくらの朝ほらけ立ちもいそかぬ鳥のこゑかな
暁のかすみをわたる鐘の音に月と花とのいろそわかるゝ

曉花

さくら花うき世にさほく匂ふかなかり火くらき庭の明方
花似雲

白雲は野にも山にもかゝりけりいつれまことの櫻なるらん

春江花月夜

なかれ江の水さほく月ふけてはなも霞にねふる夜半かな
橋邊花

かけすてし野邊の小川の丸木橋渡るも花のあれはなりけり

都花

うちつれて都をこめか絹傘をさしものさけき花さかりかな

花のころ保津川を下りて

水上にいかりし波も大井川打ちなこみたる花のしたかけ

春日遅

山の端に日はまた高しけさみてし花はきのふの心地すれども

霞中花

いつのよにならひそめてか櫻花さけは霞のそひて立つらん
心あての外さへけさは霞みけりおもはぬ方も花や咲くらん

春夜

月花に酔ひてよりそふおはしまの價しられぬ夜半の一時

月前花

くれ残る庭のさくらを出て見れはみそら朧に月も出にけり
照りもせず曇らぬ月の朧夜をおのかさきこや花は咲くらん

春池

瀧の音もさほく霞みて長閑なる池のころの見ゆる春かな

春水

おり立ちて根芹つむへくなりけり日影にぬるむ春の澤水

菜花

賤か屋も春はあや菜のはなむしろしきこそわたせ垣の内外に
日にそへて木のめ春さめふるここに縣の鈴菜花になりゆく

落花多

咲く花の雲に埋れし山のはもあらはるゝまで散るさくらかな

落花入簾

玉すたれかゝくる袖にちりくなり風さむからぬ花のしら雪
雪こ見てかゝくるをすの外山より眞袖のさかに花を散りくる

ねやの中に匂ふすこしの月影は風のはこひし櫻なりけり
深山残花

鶯のさこよりかへるころしもや深山のはなは咲き匂ふらん
絲遊

いごまあれや霞の衣ぬひさして春日のまかに絲の遊へる
野雲雀

若草のねよけに見ゆる春の野は立ちもあからて雲雀啼くなり
春の暮かた大津より京都へ歸る道にて

くれてゆく春をはごめぬ逢坂の關の清水にちるさくらかな
春日野にて

花ちりて春もゆきけの澤水に初音うかへてなくほこゝきす
春日山千代のふる木に藤波のかゝるあはれを誰かしるらん

蝶

ちりてゆく花の別れにぬらしけん立ち舞ふ蝶の袖重けなる
まよひにし綾菜すゝしろ花ちりて羽かひかろけに小蝶ごふなり
ちる露に夢やさめけん咲く花の色にわかれて小蝶ごふなり

櫻實

櫻花雪ごまかひてちりしかごきえぬ匂ひそ實をむすひける

名所山明

笠置山むかしをこへは山ふきのいはぬ色にも露そこほるゝ
櫻にはわかれし春も大井川しはしたゆたふやまふきの花
春のくれにもものへゆく道にて

雲と見し花の西山ひかしま青葉かちにもなれるはるかな
燕來

咲く花の千里の雲をつはくらめつはさにかけて今や來つらん
燕

花ちりて人めは枯れしわか宿をこはぬ日もなきつはくらめかな
春秋のあらそひに春の方を

そこそなく海をいつはる霧ならてこゝろたかくも立つ霞かな

夏

賀茂祭

賀茂川の流れの音も琴の音もあひにあふ日のけふの祭か
かも川の涼しき風は舞人のかへす袖より立ちそめぬらん

紫陽華

望月のたらへる御代ごあちさゐの華も圓かに咲き匂ふらん

牡丹

ふかみ草ふかくもはなの匂ふより櫻の後もはるごいふらん

瀧邊新樹

瀧つ瀬は若葉こもりに音つれて顯はならぬそ涼しかりける

郭公一聲

起きいてゝ誰かきくらん郭公月は雲間の夜半のひごころ
一聲のあこは降り出つる村雨のおこにまきれてゆく郭公

旅宿五月雨

故郷のそらこそみえね五月雨にけふも旅寢の窓くらくして
よひくに宿こそかはれ五月雨の音は枕をはなれさりけり

船中梅雨

五月雨に水かさたかくもなりにけり岸の梢に船つなくまで
橋五月雨

旅人のゆきゝごたえて五月雨の雲立ちわたる谷のかけはし
梔子花

五月雨の軒の雫もかをるなり庭のくちなしはなや咲くらん
明治三十五年の夏よめる歌ごも

雨にくれ雨にあけつゝ水無月を過ぎてもはれぬ五月雨の空
降りつゝ雨肌寒き庭の面は苔のころもをかさねきにけり
なく蟬のこゑもきこえず夏山は梢にあめの音ばかりして
天の川せきし堤やくえぬらんみなきり落つるゆふたちの雨
曉 水 鷄

有明の月は入りにし山もこの木の下やみにくひな啼くなり
水鷄何方

夜もすから小雨ふる江の捨小舟さしも定めす水鷄なくなり

雨中鷺

降りつゝ雨にゆきゝの船たえて水際のごかにたてる白鷺
鷺 立 洲

おり立ちてあさりもやらぬ白鷺は何をうきすにももの思ふらん
若 楓

てらす日のかげに緑のいろそひて夏も榮ある若かへてかな
河 邊 夏 來

川風に衣ふかせておもふさち舟あそひするなつは來にけり
風前夏草 明治二十八年日清の戦ありける年

天つ風ふけはなひかぬ隈もなし夏草しけるもろこしのはら
大井川にて

岩かごにもゆる丹つゝし色きえて水際すゝしく螢飛ふなり

白蓮満池

水あせし池のこゝろを見せしめてたつやはちすの花の白波

夏 菊

千代しめし岩根の菊も秋またて花のさかりを世にいそくらん
ませ垣に夏の日影やへたつらんかをりすしき菊の下つゆ
扇不離手

草木こそ枝もうこかね手にならす扇の風の絶ゆるまもなし

夏 風

日さかりの空に涼しく吹く風は夏なき里や過ぎて來つらん

風 鈴

吹き通ふ風の涼しき音つれは軒にかゝりて絶ゆるまもなし

苦 熱

草の葉もしほるゝ夏の日盛は露ならぬ身もおきごころなし

位勳ごもに昇りける年の夏よめる

水無月の照りつゝく日もわか身には恵みの露を重ねてそおく

夏 雲

山の端も見るくきえて立雲に雨まつほこの空そすしき

夏 舟 大井川にて

涼しさは岩にくたけて立つ波のはなのなかゆくけふの友船

夕 立 風

はたゝ神水上遠くごゝろきて夕浪たかくかせさわくなり

松 下 泉

すしきは風のもよほす琴の音もわきてなかるゝ松の下水

曉蚊遣火

夏の夜も明方寒く月更けてこゝろはそくものころかやり火
雪のまごおもひしほごにかやり火の烟の末は明そめにけり

螢 多

稻葉ふく風に螢のむれ立ちて田中の庵はゆふやみもなし
きのふけふ門田の面にあまるらんねやのうちまで螢ごふなり

河邊 螢

誰か戀のつもるおもひそみなの川よるは螢の淵ご成りぬる

夏 枕

ほたるごふ淺澤沼のまこも草まくらに一夜むすひてしかな

水邊 夏月

影やごすほごも夏野のわすれ水行方やいつこみしか夜の月

海邊 納涼

夏をしものせてや波のかへりけん潮のひかた風のすゝしさ

秋

立 秋

風の音はまたかはらねごちりそめし桐のはつかに秋はきにけり
山窓をおほひし桐のちりそめてもるゝ日影も秋になりぬる

大崎の桐谷に家に移しける時

かくれすむ宿にはあれご世の中の秋をまつしる桐かやの里

秋來 水邊

きのふけふ秋の立つらん賀茂川の涼みの床に人そまれなる

初 秋 露

軒にちる桐のひと葉のひゝきよりこほれそめたる庭の朝露

都 早 秋

秋の野にまた多からぬ蟲の音を都のいちのちまたにそきく
亡き靈を祭るもいまや近からん都にはこふはなの八千くさ

水邊草花

涼みせし川への床のやれまより匂ひいてたる秋くさのはな
立つ波のしらゆふ花も咲きそひて匂ひすしき秋の八千草

秋蝶

八千草におもひみたれて秋の野の花より花に小蝶こふなり

風前萩

花妻に宿かる露をねたしこや萩か枝さらすかせの吹くらん

秋情寄萩

おほかたの秋の哀を身におひて露おもけなる萩のはなつま

秋草交色

絲すゝき亂れてかゝる秋はきは誰か織りのこす錦なるらん

雁未來

秋立ちて曉露はおきたれここよを雁の出てかてにする

野鶉

難波津をあさ立ち來れば秋風のさむきあへ野に鶉なくなり
野こなりし昔の畑のあごこへはのこる粟生に鶉なくなり

鈴蟲

つきくに秋を傳へて驛路のなかき夜すから鈴むしのなく
蟲のなく秋の野中のふるやしる人はならさぬ鈴の音そする

秋夜長

暮れてより昇りし月の山の端に落ちてもあけぬ秋の夜長さ
ねさめてもねさめても猶明やらぬ夜をこそ人はあきさいふらめ

閑庭露滋

曉のつゆや末葉におもるらんそよきもあへぬ庭のをきはら

霧中女郎花

男山たつ名をうしごをみなへし狭霧かくれに花はさくらん
かくれても霧のこはりのうすければ人めにたてる女郎花かな

海霧

貢船こたえぬ御代の海原に霧のまかきをたれかゆひけん

秋海

むらかりてこふや鷗もまよふらん霧立ち渡るおきの八十島

水邊の巖の上に菊咲けるを

香をこめて誰か汲むらん奥山の岩根のきくの千代の下水

菊交薄

吹上の濱にはあらてわかやこの菊にをはなの波もよせけり

菊の宴に菅公御衣を賜ふ圖に

雲の上の菊のうたけに賜はりし御衣のかをりは身にやしみけん

菊 四條暖神社に奉るとて

なき數に入にし菊はなか／＼に千年をかけて香をそこむる

菊色々

世ごごもに移りかはりて菊の花色も千種に咲きわかれつゝ
おのかしゝ咲わかれても菊の花千代の根さしは變らさりけり

田家菊

稻はみな刈りて收めし賤かやの垣根のさかに菊のはなさく

月下菊

ませのうちに霜夜の月のかけ更けて翁さひする白菊のはな

菊花遠薰

月にふく嵐の末そ匂ふなるあまつ雲井のきくや咲くらん
人のもこに菊見にもものしけるさき

色に香に匂ひ出にけり菊の花君か千させのころつくしは

故郷秋

古の秋の名残をきてみれば露はかりなるふるさこのには

山紅葉

紅葉のにしきかさねて山ひめのたもとゆたけき秋の色かな

山家紅葉

鳥の音も瀧のひききも紅葉のいろをはなれぬ秋の山さこ

嵐山に紅葉見に行きける時

紅葉の下照る色の赤ければをくらは山の名にこそありけれ

遠村紅葉

ささ川にさぼくさらせる調布の末のにしきや紅葉なるらん

花かめに榎紅葉菊をさしたるを見てものゝ名に

よめご人のいひければ

遙にもみちにはありさかやまのはのたかきくも間を通ふ柚人

鹿聲遠近

夕月夜峯にふもこに聞ゆなりおなしおもひのさをしかの聲
野もやまも紅葉すればやきのふけふ所定めす鹿のなくらん

高雄にて

さをしかも幾よの秋か紅葉のかけに御法の聲を聞くらん

古寺紅葉

小野観修寺の堂の繕ひ出来たる秋その寺にて

榮えけん昔の秋にかへるてのいろもてりそふ小野のやま寺

蔦紅葉

紅にそめてかけたる蔦かつら老木のまつもわかゝへるまで

初昇月

よのちりの雲もかゝらて月影の清きは出つる折にそ有りける

波間月

よもすから宿るありそに影ちりてしつこゝろなき波の上の月

もち月のたらへる影をねたしこやよせてはくたく沖つ白波

連夜觀月

なつかしき夕の空に見てしより月は夜毎にめかれさりけり

獨惜月

わかせこか歸りし後もねやのこをさすかにをしき月の影かな

月下葛

落ちかゝる影をしはしこませ垣の月にすかりて咲くや葛花

橋上月

打ちわたり誰も見よこかてる月の桂の川にはしはかけゝん

月前遠情

わたのはら波間はなるゝ月影を龍の宮居に誰かをしむらん

あら熊のすむてふやまの奥までもいるは月見る心なりけり

月前松風

ひこりゆく雲間の月を松風のよふかくおくるおこの淋しさ

月のあかゝりける夜まれ人のおこつれ給ひければ

月見んごこひこそ來ませ今宵のみしめしかひある川そひの宿

松間月

わかやこの松は木高く老いぬれこ面かはりせぬ秋の夜の月

月影のはなれかたくもみゆるかな軒端にたかきまつの梢を

橋上月

浪の上のきらめく月を横きりてかけわたしたるさのゝ舟橋

月前擣衣

暮れかゝる空まぢかほに打ち出て月にこもなふさよ砧かな
晴ゆけは音さへさえてさよきぬた月を心ごうちすさふなり

海邊鹿

釣りやめて人は歸りし磯崎の松ふくかせにをしかなくなり

暮秋鹿

夕日影さむき末野になく鹿のこゑもしくるゝ秋のくれかな

秋の末つかた神功皇后の御陵のあたりみめぐりける時

池の名も埋れて佐紀の盾列は稻の穂波ご立ちかはりけり

紅葉ちる佐紀の盾列たてならへくれゆく秋をこゝめてしかな

冬

落葉有聲

時知らぬ谷間かくれの柴のごも落葉そ冬のごゑはたてける
さをしかのなく音もそひて散りくなり春日の山の峰の紅葉

古寺落葉

みほごけの袖にすかりて山寺の兒の手柏もかせにちりつゝ
さひしきは落葉も雨ごふる寺のあかる埋れて汲む人もなし

風前時雨

くもるごも見えぬみ空の何處より風は時雨を誘ひきつらん
笹竹のうごくご見れば影さえて風たつまごに時雨ふりきぬ

樵路時雨

宮木伐るひよきの末に風立ちてみやまち遠く時雨きにけり
おふ柴にまつはる蔦の色みれば山のあなたやしくれそめけん
冬のころ大和の高市郡に旅寝してよめる

みつの山ゆきかふ雲のあらそひて空さためなく時雨降るなり
晴れわたる光やいかに寒からんつるきの池の冬の夜の月
初霜

山畑に色つく柿のみにしみてさむさおほゆるけさのはつ霜
橋霜

おく霜に跡をのこして朝またき狩野の橋を誰かわたりけん
月照寒草

影やこすをはなも霜にをれふして月の色さへ冬かれにけり
眞萩原秋のちきりをおもひ出て霜のふる枝に月やこりけり

冬 聲

朝霜のおき出てきけは庭鳥のこゑさへ冬のものとなりなき

寒 松

おく霜の花ちる野邊の朝風にひこりすみたる松のおこかな

聽 雪

梢よりしつるゝ雪の音はかりねやにきこえて夜は更けにけり
音つるゝ窓の吹雪のさらゝに寒さかさぬる冬のははかな

漁 村 雪

あまの子に宿やからまし磯山の松おもしろき雪の夕くれ
網引すこ網子こゝのふる聲もなし苦屋も雪に冬こもりして
こき歸る舟路にさえし夕くれの雨はごまやの雪こなりぬる

樵 路 雪

岨路のゆきゝはたえぬ宮木伐る假屋も雪に冬こもりして
賤のをかおふ柴白しこのゆふへかへる山路に初き雪やふる
吹く風のおごも埋れてふる雪に山路をかよふ柴人もなし

冬 人事

ふる雪に冬こもりして裁ちぬはん月のよすから打ちし衣を
雪霽れていゝ寒かりけるあした鹿島の御社に詣てゝ

さりなしゝ御手の立氷を今もなほ鹿島の宮の軒端にそみる

炭 竈

雪はるゝ遠山もごに炭かまの數あらはれてけむり立つなり
山かつか世わたる道かほそくゝ夕日にけふる峯の炭かま

冬 暖

日影さすみなみの窓の冬こもり春の外なる春をしめつゝ

筧 氷

汲みごらん水もこほれる山里は春をかけひのかけてこそまで
世を忍ふほそきかけひの中にさへなかれをこめて氷ぬにけり

爐火似春

夢に見し春のあそひの長閑さをうつゝに残すよはの埋火
打ちかこみかたるはなしも春めきぬ眞柴たく火の暖にして

雑

歴代山陵の年久しく荒果てゝ其の所たに知られさりしもい
ご多かりけるを文久元治の頃大かたは定められけるに猶さ
たかならざるも有りけるを明治二十二年の夏こごくく尋
ね出て奉りて修陵の工事をへければおなし二十六年の春
大御使をその山陵に遣はされて御祭りさり行はせ給ひける
時おのれもその事に仕へ奉りてよめる

三月二日 安徳天皇阿彌陀寺陵

今は世にやすらげくませ人こゝろ赤間のうらは仇波もなし

同日 淳仁天皇淡路陵

御使の大御よそひの光より淡路しまねも春や立つらん
あまの子も鹽たれ衣ぬきかへてうらめつらしきけふの御祭

同日 綏靖天皇桃花鳥田丘上陵

曇りなき御代のしるしか久かたのつきたの岡も顯はれにけり
いたつらに老いぬご見えし陵の松も世に經しかひはありけり

同日 顯宗天皇傍丘磐坏丘南陵

御前に松の片枝のいと長うさ
してたるありければ

盤坏のみ墓は茲と松かえのさし示してやけふを待ちけん

同日 武烈天皇傍丘磐坏丘北陵

今は世にいはてもしるしいはつきの北のみさゝき山高くして

同十六日 崇峻天皇倉梯岡上陵

けふこそはかけてかひあるぬは玉のくらはし川の波の白ゆふ

同十七日 天武天皇
持統天皇 檜隈大内陵

同日 文武天皇檜隈安古岡上陵

右御兩所御祭の日はおのれさはること有りて仕へ奉らさり
ければ歌はよます

同二十一日 光孝天皇後田邑陵

畑中にもはかまもりし老松のたかきみさを、仰くけふかな

同日 村上天皇村上陵

大君の御代も長尾の村上にふりしみはかを見てつるかな

同二十三日 圓融院天皇後村上陵

立ちかこむ竹の林のうちこそ千代のみあらか定めましけれ

同二十四日 三條院天皇北山陵

大君のみはか祭らすけふこてや北山かせも世にのさかなる

同二十五日 冷泉院天皇櫻本陵

山の端も霞みて花のさくら本ざる玉串にはるかせそ吹く

同 日 後一條天皇菩提樹院陵 神樂岡

みさゝきのけふのまつりに岡の名の神樂もよふす松風の音

同二十六日 二條院天皇香隆寺陵 茶畑のうちにあり

打ちわたす畑の木の芽の香も隆くきつく御墓のいつの玉垣

同二十七日 順徳院天皇大原陵

降雪のゆふしてこりてひらのねもけふの御祭仕へけらしも

同二十八日 仲恭天皇九條陵

過ぎし世のうき雲はれてみさゝきの玉の齋垣にたつ塵もなし

同 日 光明院天皇大光明寺陵

伏見山みはか祭らす御酒御饌に梅か香そへて春かせそふく

同三十日 弘文天皇長等山前陵

氷のしみはかの苔のしたつゆもこけてのさけき長等山風

同三十一日 歴代の修陵の工事こさくくをへたるよしを

孝明天皇後月輪東山陵に告げ奉らしめ給ひける時

かゝりけん大御心の雲はれていまやさやけき月の輪のやま
のさかなるまつりの庭のものゝねに調へあはする峯の松風

阿波の土御門院天皇の崩御ましまし御跡をこひて

みはかへに音忍ひて世の人のなくやなみたの池谷のさこ

久しく詣てさりし北白川陵に詣て

老い朽ちて世に忘れしわか身をも昔の友さ松や見るらん

素蓋之鳴尊 日韓合併のありける年

誰か世にしるやしらきのそしもりをはやくしめにし神の心を
するつひに御國のものごから國に八十の木種を神やまきけん

丹波の山國の常照寺にて

光嚴院天皇の尊影を拜みて

かけくらしき谷間も君かみゆきより常に照せる法のごもし火

日岡陵に石の玉垣を築かれける時 明治二十一年の春

播磨瀧沖行くあまも仰き見ん照る日の岡のいつのたまかき

佐保山南陵に數多たひ猿の木傳ふを見たりご守

部らか語るを聞きて

古を忍ふ思ひややまさるのさりては來なくみさゝきの上に

雅成親王の御墓の守部某か公にこひて御墓に石柵を

設けゝる時

残るらん君かいさをは御墓邊のいつの玉垣いつの世までも

六美村の悠紀田をよめる 大正四年

嬉しごや神もうくらん君ご臣ごむつみのさごの小田の美稻

河内の今仲翁が年ころ山陵に仕へ奉りて功績いちし
るしかりければ朝廷より位賜はりけるよし聞きてそ

の仕へ奉れる山陵によせて祝ひの心をよみて送る

天翔ける高鷲原のたかくに月のかつらも折りかさしてよ
末遠く惠我の長野のなからへてしめよ位のしなのきはみを
坂門原ごさしかためて守りこしいさをは千代もくちせさるらん
埴生野の繁きはまれを身におひて世に坂本のさかえゆくらん
雲の上に君かいさをやうたふらん埴生の岡のみねのまつ風
河内の今仲翁の別業なる笑青庵の記をかきて送りけ
る時その後にかきそへける歌

山ふかく入らてもちりの世はさけぬ松の千年の影にかくれて
河内の吉村ぬしか山陵に仕へ奉りて功績顯著しかり
ければ朝廷より位賜はりけるよし聞きてその仕へ奉
れる山陵によせて祝ひの心をよみて送る

今は世に恵我の藻伏のふして思ひおきて仰かん君かいさを
久かたの天翔りけん白鳥の高きはまれを得たるきみかな
朝夕につかふる君か友ならん千代ふる市のみさゝきの松
千はやふる神と君との仲つ山なかざりもちて仕へけんかも
君か名のほまれを千代にうたふらん恵我の長野の陵の松
又吉村ぬしか家系のこころもおもひ出て

宇治川のさきかけしけん遠つ祖に愧ちぬは君か譽なりけり

寄松祝

惺蟬翁の贈位ありける時

君か植えし松や年へて雲井まで千代の調へをきこえあけらん

兵庫縣宍粟郡三方村縣の社人進藤某の還曆の賀に

むすひおく千代のちきりやかたからんみかたの里の縣社に

大和の飛鳥村なる平田ぬしの古稀の賀に

萬代をふちあかはらの眞清水に君かよはひをうつしてそみる
あすか川七瀬のよこのよこみなく千代の年波越えん君はも

畫工某の古稀の年賀に

ころ年のまにくうつす鶴龜の千代萬代はきみそかそへん

寄瓢祝

人の古稀の年賀に

久方の天のよさつらつらくに思へはななかき齡なりけり

千代倉鹿村翁の古稀の賀に

かくなから君や幾千代くらふへきたくひなきまで立ち榮ゆらん

寄石祝

人の八十の年賀に

としつみて八十うち川の龜石のその萬代は君そかそへん
美濃の國人某の年賀に

千代經へき君かためにかかゝるらん老を養ふ瀧のしらいと

寄松祝 人の年賀に

限りなき君かよはひを松かえにかけて千年さほくもかしこし
人の年賀に春日見鶴さいへる心を

春の日の光に巢たつひな鶴のゝさけき千代は君そかそへん
同 松多年友さいへる心を

影たかくいやたち繁れ庭の松君かちこそせの友さ見るまで
贈位ありける人の祭に對橋問昔さいふことを

在りし世にいさをもたかく立花の残る匂ひは人もこそこへ
英照皇太后崩御の時京都にもものする事ありて東海道

を過ぎけるに空かき曇りければ

國民のなげきの狹霧たちみちて富士の高ねもかき曇りけん
伏見桃山陵にて

國民のなげきの聲か桃山の松にかなしきよはのあきかせ
みはかへにはらはひ泣きし國民のなみたや氷るけきの初霜
雪降りける朝桃山伏見陵の日供に仕へ奉りて

玉すたれかゝくる袖に風さえて雪の花ちるみさゝきの松
寄月懷舊 定家卿の祭に

うるはしきことはの露の跡さめて祭のにはに月そやさされる
寄蓮懷舊 高野山にて豊臣秀次の法會ありけるとき

夏寒き高野のおくの花はちすはかなく散りし昔をそおもふ
花蓮かをりもあへず散りにしは夕たつ風やはけしかりけん

井伊直弼朝臣の靈祭に寄柳懷舊

青柳の絲のもつれを身におひてきえし彌生の三日月のかけ

島津久光公の追悼會に懷往事こいへる心を

君かよの道ひらかんごますらをの刈りてすてたる生麥のさこ

君かよの道を昔にさつまかたはや手の風のかへしするかな

維新殉難士舊膳所藩増田某の五十年忌に時雨こいふ題にて

よめる その母今に世にありと聞きて

ちり残るはゝその森のむらしくれあはれ幾度袖ぬらしけん

君をしもなご仇波にまかせけんせゝのしからみせきあへすして

香川景樹翁の靈祭に花間鶯を

ちる花に君かうたひしここのはをおもひ出てゝや鶯のなく

人の二十年の忌に寄稻懷舊

八束穂の小田の年波かそふれは過ぎにし人も今やはたごせ

親しかりける友の三回忌に寄杜鵑懷舊こいふことを

在りしよの三ごせの昔思ひ出て血になくよはの山ほごゝきす

大橋長熹翁の一週の祭に殘花を

今もなほ世にしられけり文の上に残るこごはの花の匂ひは

農學士足立正堅ぬしの戦死を悼みて 明治三十七年

なからへて學ひし道を世にしかはけふの功に猶まさましを

文積堂主人が追悼會に秋風入琴

亡き人をしのふ小琴の調へよりかなしき秋の風は立つらん

人のなくなりけるこき夏草露こいふことを

水無月のてる日のおつき盛りにも草のたもこや露けかるらん

寄笛懷舊

月影に笛の音すみて在りしよの昔のあきに似たる夜半かな
宮殿に宿直しける夜

きくまゝに時のきさまの音さえてこのいのつほね夜そふけにける
杖の歌よみてよこ人のいひければ

九重の御階の上にゆるされて君はつくらん杖そこの杖
抜句 千こせのためし

舞鶴のゆくへを見れば君が代の千年のためし末はるかなり
本間山城入道か澤田城の趾をみて阿新丸のふるこご
思ひ出て

水たまる小田のあたりや吳竹をなひけ渡りしいけの跡かも
昔文治の頃わが祖親幹が畑田城を築きしより天正十
九年迄凡四百年の間共に敵を守り勳功をたてし其人
々の裔孫等相はかりて此の城趾に學校を設けあまた

の兒童をつこへても學ひせしむるこごゝなれるは
いご深き縁になむよりてその心をよめる

わらはへも競ひて學へ遠つ祖のをたけひしけん城山の上に
遠つ祖の仇まもりけん城山も學ひの庭さいまはなりにき
琵琶の曲をきゝてよめる

三つ栗のひとつはなれし身のうさを磯打波の音にたてつゝ
尋ねつる深きなさはさつまた千尋の底も及はさりけり
京都にて疏水棧橋さいふ題を得て

さゝ波や志賀のうらわの水 upper を岸のかけはしかけて忍ひつ
保津川の書物岩を

昔誰か心をこめてよみつらん千卷のふみの岩さなるまで
月のあかりりける夜ある山里にて

晴るゝ夜のかけひの雫音すみて月のおち水たるかこそきく
南禪寺の千本亭にて

影たかき竝木の松をかそへつゝつひに千本の庵に來にけり
大橋長熹翁が京都より東京に歸る時秋來水邊
こいふこを

きのふけふ水きは涼しき隅田川秋も立ちてや君を待つらん
鳴川の波立ちわかれゆく人のこゝろに秋のかせや立つらん
ある年五月雨いごなく降りつゝきたる頃選舉競争さか
いへるいごいまはしきさわきの世にきこえければ

岩根木根草のかきはもこゝひて世はこゝやみの長雨の空
風いたくふきあれる日ものへ行く道にて

こりごめんひまもあらしに奪はれしわかかゝふりそ空に舞ふなる
大空に風のもて行くかゝふりは月の桂にかけんこやする

電車のゆきゝいごしけき市のちまたに家居しけるころ

さわかしき車の音も馴れぬればきこえぬひまそ淋しかりける

隣家鶏

夕されは隣のやごに歸りけんあさりしかけの聲もきこえす

廢宅

昔見し花のこはりもやれはてゝかけぬくまなきさゝかにの絲

夢故人

天雲の遠くへたてし人もなほこゝろあへはや夢にみゆらん

盆栽

窓のうちにありごはすれご深山木の雲に聳ゆるさまは見えけり

讀書樂

けふもまたひもごく書の樂しさはいかなる人の跡を見るらん

社頭遇友

をたまきの絲の絶えても月日經し人をうれしくみわの神杉
谷 杉

谷深くかくすすれと雲の上にあまりて立てるいつのほこ杉
鹽屋烟

立ちならふ松にかゝりてもしほやく浦の烟も幾世へぬらん
水村訪友

きてみれば心のうさも流れ江の水きはしめたる君か宿かな
山家客來

嬉しくも今朝狩り得てし山幸は君かさふへきしるしなりけん
山影映水

ゆく水の清き心やくみつらん雲あるやまもかけうつすなり

にこりなき大江の水は春秋をよそほふ山のかゝみなりけり

漁村燈火

暮れかゝる島山影にこもし火のつくやあまの住家なるらん

窓雨晴

降る雨もなかは晴れゆく山窓の軒よりわたす虹のかけはし

澗底松風

矢さけひの音にまかひてしつかたけ谷間さよもす松の夜嵐

水邊松風

すみのえの水際をさらす音たてゝ松ふく風も幾代經ぬらん

鶴聲近枕

夢に見しよもきか島の鶴ならん枕へちかくおこつれてゆく

夜聞櫓聲

暗き夜にこゑよひすてゝ友船の櫓の音高くこきわかれゆく
松

老にける松はいくらの年月をかさねて雲のうへにたつらん
蘭

吹くかせもこはぬ谷間にさく花の高きかをりは誰か知る蘭
竹

吳竹のつねに空しき心もてうきふし知らず世をや經なまし
猫

紅の綱引きやめてのさけくもまごの日かけに眠るからねこ
鳥

さしのほる梢の月にはかられてねくらを出つるさよ鳥かな
呼子鳥

柴人も歸りしあごの淋しさをくれゆく空によふこごりかな
獨活に山葵をゑかきたるに

あなうごもいはていそしむ賤か業人の好めるものを作りて
都にはたらぬものなし雲のある谷間のわさひやま畑のうご
猩々の扇をさくけて舞ふごころ

長閑なる御代にあふきの嬉しさをほにあけてこそ舞ひいてにけれ
お福の像をゑかけるうへに

世の中によこごうみ出す母なれや錦よそほひゑましけにして
かなへ踊の畫に

久かたの月の桂のそれならてかなへは手にもごられさりけり
かりそめの酔のすさひそ人ごはゝかなへの足のみつと語るな
大原女をかきたる畫に

都にもたく椎柴をいそくらん北やま時雨さえまさるなり
西行法師

亂れゆく世のあらましを悟りてや墨の衣に身をはかへけん
還俗尼

御佛のはなご手向けし女郎花うきよの露にまたやぬれなん
茶人

しみたてる松の木影に庵しめて宇治の木の芽を煮る人や誰
貧女

いまは世に雨風いさふまもなし枯野のすゑのはきの花妻
輕業師

さらぬたに過ぎ難き世を一すちの綱によりても渡るなりけり
田家婦

あたにちる色さも見えず賤かやの軒端に咲ける山なしの花

遊女

いつまでかよるへもなみに漂ひて朝妻船のあさましの身や

天

あらかねの土こわかれし昔よりすみてひさしき天の色かな
てらす日の落れは昇る月の船さしもあかるき天の道かな

心

飛驒人かうつ墨繩のひこ筋にたてし心のたわむへしやは

忙

あまの子かめかり鹽やく磯崎のいそかはしくもゆく月日かな

舞

つま琴の調へのごがに通ふかなたちつらねたる花の眞袖に

衣

ちりひちにまされる市の花衣誰か着馴しゝかたみなるらん

眼

あしを舟あやうきあまの世渡りも浦のみるめのあれはなりけり

酒

ゑふまゝに忘れゆくこそ楽しけれ浮世の中はさけもさけすも

眼鏡

老のめをさへさる雲もたちまちに晴れてさやけき玉の光か

水車

絶え間なくめぐるや小田の水車ひまなき賤か業も見えつゝ

小金井紀行のうちに

いろ香にはそまぬ顔なる高萱も花の錦をかつく春かな

いつのよにちきりおきてか吹風の誘へは花のそひて行くらん

葛飾紀行のうちに

水あせてふりし細江のあしまより渡すも哀れまゝのつき橋

近江紀行の中に

いふき山雲にかくれて姉川のきしのつかさに風さわくなり

忍ふれは袖そつゆけき蒲生野のみかりにきえし皇子の昔を

空晴れける日はゝ木松を見てよめる

影高き松やみそらを拂ふらんちりはかりなる雲たにもなし

小野の観修寺にて人々さゝもに題を探りて近邊の名所を

よみける時太閤燈籠を

燈火のあかき影こそ唐人もおちしひかりの名残なりけれ

紀和紀行のうちに

さして行く方こそ見えね伯母かみね尾花かるかや影高くして
晴るゝ日も波のふゝきそ天きらふ鯨よるてふみくまのゝ浦
荒熊の住むてふ山もふみわけて暮行く秋のはてを見しかな
もみちはの赤裳裾引く妹山も夜のまに老いぬゆきの白髪
大和の入の波の温泉にて

吉野川かは瀬を清みごめくれはいて湯流るゝさこも有けり
からき世は遠くへたてし山さこを誰か鹽の葉ご名つけそめけん
那智の瀧を

大瀧の狭霧ふきまく山風のすゑやふもこの雨ごなるらん
大瀧のふゝきの風にましらひて空にうつまく峯のもみちは
熊野温泉にて

のさけさは朝明の霜の色もなし出湯なかるゝ冬の山さこ

山陰紀行のうちに

松の風雲ゐにふきて久かたの天のはしたて月そのほれる
残りなく雲霧はらふはゝき坂海ご空ごのはても見るへく
野も山も畑も青谷の里の名にたかはぬなつの初めなりけり
いさゝらはぬきてやゆかん衣見坂登りもはてす汗あえにけり
見渡せは岩根こゝしき磯つゝきしらゆふ波の花さかりなり
大山に残れる雪は伯耆の海のそらにもなみのたつかごを見る
須磨紀行のうちに

海の原日は入りはてし大そらに船の帆ひごつくれ残りけり
ふきならず人こそなけれ今もなほ青葉の笛は世にきこえつゝ
松風のしらへに楫のおごそへて舞子のうらをわたる友ふね
くたけては雪ごちりかふ浪の上に見るも涼しき淡路島やま

碁うちかこみつゝ

うちかこむ石もなかはの戦ひにひよこり越は誰か越ゆらん
嚴島紀行のうちち

ますらをの昔をこへはやしまたさやけき月に浦風そ吹く
曇りなきかけは波間にうつろひて宮居そ月のうへにうかへる
うつ汐の磯わに高くさしくなり沖つ島根に月や出つらん
筑紫紀行の中に

来てみれば昔なからの鏡山うつろふものはわか身なりけり
君か代の千代の松原見わたせは水際によする仇なみもなし
網引する聲もきこえずかきくらしふるあめさむき大村か崎
暮れかゝる旅は宿りそ急かるゝいさはやゆかんいさはやの里
雨晴れて光のさけきひの國の瓊の浦わをけふやこき出ん

しらす山登りて見ればから國はかさしたる手のうちにこそあれ
梓弓引きつかへたる矢部川のはやせの波のおごのさやけき
矢部川のきしのつかさの岩窓は強弓さりて誰か射ぬきけん
吹きあれし植木木の葉の風の音を昔語りにきゝつゝそ行く
見わたせはねくらに歸る鳥もなしゆく末遠き野への夕くれ
雨くらしひなの長路もなかくに螢こふ夜は嬉しかりけり
旅衣ふりにし身にも新田山はつほこゝきす音をはもらせり
隼人のさつまの海のかせをいたみ鹽やく畑したむせひつゝ
天さかるひなの脊肉そじしの空國におもはぬ花のさくらしまやま
海つみの都をかけてをちかへりなくや高屋の山ほこゝきす
舟すてゝかちよりゆけはをりふさこをりよろしくも汐はひにけり
朝日さす兒湯の縣の丹裳の野に遠き昔の御幸をそおもふ

草枕旅のやごりのひと夜妻すめはやさこの名には立つらん

日向の埃の嶽の麓なる可愛山陵よへる所にて

魂やごす御墓はいつこ天かけりわれにをしへよ山ほごきす
夏ころも臼杵縣にきこゆなりこゑ高千穂のやまほごきす

妻驛よりやごひたる馬のあれくるひければ

くるひつゝ進みもゆかぬあら駒は出て來し妻のさごや戀しき

熊本清正公の墓に詣てゝ

ますらをかまここの道をうるの山射向ふ敵もあらしこそ思ふ

佐賀關にて

わたのはら釣する絲のひと筋に君かみふねの道ひらきけん

大宰府の觀音寺に詣てたる時かたへにおきたりし手

袋をわすれて立出ければ

御佛にわれさゝけてん數多なる御手の數にはよしたらすごも

東北紀行の中に

最上川くたす小舟に日はくれて月にかゝれる白いこの瀧
招かれてあまも出羽の浦の袖庭よく見ゆるあきの夕なき
月影はいつしか落ちて立つ杉のはくろのやまに嵐ふくなり
鳥の海の山の裳裾はもゝふねをちらし縫ひたる波のあや織
戦ひのありし昔を鼠か關ねつゝかたりてゆくふな路かな
大空に月影しくれかせ立ちて波ほのしろし越のうなはら
三越路に誰さうき名を立山のおもはゆしこや雲かくれけん
くれぬごもよしやよし川月待ちて和倉の出湯ごはんごそ思ふ
來て見れば心ものこの國中に温泉わくらのさごはありけり
ふりさけて仰けは高し能登の臣の遠つみ祖のおくつきごころ

榎の實はむ小鳥の聲も神さひて夕日しつけき小田中のさこ
名くはしき千代のおくつきありさきくこゝそ常盤の松任の里
しみたてる杉のこするにかゝりけり飛彈の深山の有明の月
野も山も霧立ちこめしなからに殘るもさひし片われの月
位山身をしかゝめてふますこも友さしゆかん清きなかれを
この夕へ寒さもいこゝ身にしみて入りにし山の深さをそしる
厚ふすま重ねて寝ても信濃路のしなごの風は身にそしみける
坂下の旅寢にさえし夜嵐はたかねの雪さけさなりにけり
信濃路や凍るこ見てし雲晴れて初雪しろし伊那のむらやま
匂ひけんゆかりの色のおこもなし霜枯れ寒き桔梗かはら
佐渡の眞法院に承久の帝の植えおかせ給ひけるよし
いひ傳へたる苔梅さいへる大木を見て

梅津むら梅は昔をかたらねこ苔のたもごはかわくまそなき

信州飯田なる堀家の烈婦藤子の墓にて

繁りあふほりのみきはの鬼薊かりし鋭鎌のひかりさむしも

戀の歌の中に

夕くれの心もそらにものおもへは軒に雨よふやま鳩のこゑ

待久戀

霰降る鹿島の崎のそなれ松まつに久しき年そ經にける
いつしかごわか待ち渡る年月を久しきものご人は知らすや

大正六年四月二十三日印刷
大正六年四月二十五日發行

大正六年四月二十三日印刷
大正六年四月二十五日發行

非賣品

編輯兼
發行人

臺北廳大納屋龍口街四丁目百十番戶
森 武 美

印刷人

臺北撫臺街二丁目一四六番戶
遠 藤 祐 太

印刷所

臺北撫臺街二丁目一四六番戶
臺北印刷株式會社

終

